

(様式第2号)

研究No. (記載不要)	— —
-----------------	-----

平成20年度配分 研究成果発表報告書(実績)

研究名	韓国漁村における土着文化の伝統と変容—日韓文化比較の視点から—				
配分を受けた特別研究費	文化政策学部長 特別研究費			1,400 千円	
研究者氏名 (代表者)	学部名	学科名	職	氏名	共同研究者
	文化政策	国際文化	准教授	杯在圭	他 0 名
発表の方法	1 紀要 名称:文化的行為としての食生活—食研究の視座—		号数	第10号 (1頁~9頁) (2010年3月発行)	
	名称:韓国における韓服の伝統とその特徴		号数	現代アジア・アフリカセンター『アフラシア』no.7 (28-32頁) 2010年3月発酵	
	2 学会等での発表 学会等名:		発表日	平成 年 月 日	
	3 その他 発表の方法:		発表日	平成 年 月 日	

※ 学会等での発表及びその他の場合は、学会報等発表を証する資料を添付すること。

※ 配分を受けた翌年度の3月末までに提出

○ 韓国における韓服の伝統とその特徴

林 在圭
(静岡文化芸術大学)

はじめに

人間の暮らしにとって衣食住は根源的な根幹をなすものである。したがって、その変遷をたどることは人間生活史そのものをたどることにもなる。時代の流れのなかでその民族の伝統的な固有性を保ちながらも、最も外来文化の影響を受けやすいのも衣食住である。しかしこの変化の過程も、民族や社会によって大いに異なる。たちまちのうちに外来文化を受容し、それに同化していく民族もあれば、徐々に受容して自国のものに同化させていく民族もある。また最初はこれをかたくなに拒否し、後に元の形がわからなくらいまで変容してしまう民族もある。

ここでは、衣食住のうち、特に「衣」に焦点を当てて、韓国固有衣裳の韓服の伝統とその特徴についてみよう。

1. 韓国服飾の形態的特徴

韓国民族(中国の「漢民族」に対して、韓国民族は「韓民族」と呼ぶ)の固有の服飾は、柳喜卿・朴京子著の『韓国服飾文化史』(1983)によると、「襦(ユ)・袴(ゴ)と裳(サン) 裙(グン)・袍(ポー)を中心にして、冠帽(クワンモ)・帯(デー)・靴(ホァ)または履(リ)」が加わったものが基本型であるという。これは騎乗に都合の良い北方の胡服系統に属するものである。

《襦》

襦(ユ)は、今日の「ジョゴリ」と呼ばれる上半身に着る短衣であり、元来は男女の区別がなく、ただ袖の飾り模様である襷(セン)が違うだけである。そして、4~7世紀の身分制度が厳格になってきた集権的王国時代(「三国時代」と呼ぶ)になると、外衣・内衣ともに男女服の形が確立される。

三国時代の襦は丈の長さが、今日のジョゴリよりも長くお尻まで届くもので、腰には帯をしめていた。高麗末期に

なると、蒙古の影響を受け襦の丈が短くなり、帯をしめる代わりに結び紐(ゴルム)をつけるようになる。そして、袖下が直線から曲線へと変化する。なお襦は襦と袍(後述)などの領(ひれ)・衿(おくみ)・裾・袖口に縁取りのよう



につけたものである。襦は縁を補強するためあって、男女貴賤を問わずつけられていたが、やがて飾りとして修飾的意味が強くなっていく。

《袴》

袴(ゴ)は、現在の「バジ」や「コイ」と呼ばれる下にはく幅が広いズボンである。袴は用途によって、幅と長さが異なる。袴は防寒と騎馬に適したものとして発生した北方遊牧民の影響が強く、韓国民族の固有の衣服のひとつとなっている。また袴は『三国史記』の「色服條」によると、婦人服の中にも記述されており、袴は男女とも区別なく着ていた。しかし、婦女子は袴の上に裳(サン)を重ね着することもあったが、袴は必ず着るという着袴が基本服装となっていた。

裳を着るのは、中国または南方系の影響によるもので、儀礼的な機能をもっていたのが、やがてこれが一般化したのではないかと考えられている。今日の「バジ」という名称は、朝鮮時代の鄭麟趾が「把持」(バジ)と記したのが最初で、後に「バジ」に変わるが、これは「ジョゴリ」に対応して変わったものとみられる。男性のバジは形態的には昔も今も変化はないが、朝鮮時代には幅が広くなったり狭くなったりする。女性のバジは肌着化し、近代化とともに再び表に着るものとなってくる。



《裳》

裳(サン)は裙(グン)の原型であり、今日の「チマ」と呼ばれる下に着るスカートである。三国時代までの裳は女性専用のものであった。しかし、統一新羅時代(676-935)になると、唐の服飾制度を導入し、男性も上衣下裳のジョゴリとチマがくつittedものを着るようになる。朝鮮時代にも



国王をはじめ文武官吏が礼服時に裳を着用した。裳の形態は時代や性別によって異なるが、今日のような形は朝鮮時代に確立された。

女性の普段着としては「短チマ」と「長チマ」があって、礼服としては「スランチマ」と「デランチマ」に大別される。短チマは庶民や賤民のみが着るもので、長チマは庶民や両班層の女性も着るが、礼服としても用いられた。他方、小礼服のスランチマは飾りの膝襷を一段、大礼服のデランチマは膝襷を二段、それぞれチマの下端につけたものである。

《袍》

袍(ポー)はバジ・ジョゴリの上に着る外衣で、洋服の外套に似て足首まで長いものであり、儀礼と防寒のために男女とも着用していた。袍には襦と同様に襷がつけられ、腰には帯をしめる。本来、身分や階級を問わず着用していた古代の袍は防寒の目的であったが、やがて儀礼的な目的へと変化した。そのため、普段は襦と袴、すなわちバジ・ジョゴリだけを着用していたのである。したがって韓国固有の伝統衣裳の「韓服」といえば、「バジ・ジョゴリ」あるいは「チマ・ジョゴリ」と呼ばれる。

ところで、袍は時代の変遷とともに上衣下裳式の「帖裏」から、明の影響を受けて「直領」へと変わり、豊臣秀吉による朝鮮出兵の壬辰倭乱以降は「道袍」へ、そして「斂衣」へと変わり、やがて朝鮮時代の末期になると、「四方がふさがっている」という意味から由来する「ドゥルマギ」(周衣)を着用するようになる。

基本的に袍は古代より朝鮮時代に至るまで着用され、開花期の1884年の「甲申衣服改革」の際に私服は貴賤を問わず袖の広い道袍・直領・斂衣などは廃止となり、袖が細いドゥルマギが着られるようになった。元来ドゥルマギは普段着であり、道袍の下に着る中着であった。しかし庶民はこれを外衣として着用していた。

このように袍は高麗時代を経て朝鮮時代になると、特に男性の場合に儀礼的なものとなり、洋服の外套と違って、一年中着用するものとなった。

《冠帽》

冠帽(クワンモ)は時代によってその種類や名称が異なるが、形態的には大きく「冠」「帽」「笠」「巾」の4つに分けられる。冠帽の基本は巾にあるが、これに飾り等がつけられ、多様なものへと発達した。冠は額に巻く部分の上に前から後ろへ連結するためのワタシが存在するものであり、帽は頭全体を包むものである。笠はつばがついている

もので、巾は一枚の布で包む最も単純な形のものである。しかし、これらの形態は明確に区別されものではなく、相互に錯綜することも少なくない。

《帯》

帯(デー)は動物の皮や布でつくられ、やがて革帯に飾り金具の銚をつけ、身分階級を表す象徴的な意味をもつようになる。古墳壁画などにみられるように三国時代は、身分階級によって帯の色が異なっており、飾り金具の銚をつけた銚帯が広く使われていた。

高麗時代には革帯・束帯(銚をつけ、両側をつなげるようにつくられたもの)・鞆帯(布で帯の形に作り、その上に革をつけ、長方形・方形の銚をつけたもの)・糸帯(糸でつくる帯)・纏帯(長い布を巻き付けながらつくる帯)がみられ、朝鮮時代にまで受け継がれている。特に朝鮮時代の帯は官服に着用する「品帯」(階級を表す帯)の帯と普段着の平常服にしめる「布帛帯」(木綿や絹でつくる帯)の紐とに大別される。帯は身分階級によって材料や色が異なっていたのである。

《靴と履》

靴(ホァ)と履(リ)は形態的違いから、長靴のようにクツの首が高くつけられているものが靴で、防寒・防浸に適した北方系のクツである。一方、履(リ)はクツの首が短いもので、南方系のクツである。靴と履を合わせて、現在は「シン」と呼ぶ。

三国時代には履は主として貴族階級がはき、統一新羅時代には靴と履が併用されていた。高麗初期には主に履が、高麗末期には逆に靴が多用される。朝鮮時代には靴は上流階級のみならず、一般の庶民には履の「鞋」が代表的な履きものとして普及した。このようにクツは身分階級によって色や材料、形態も異なっていた。靴と履の材料としては革・布帛・糸・草・木・金属に至るまで様々なものが用いられている。

こうしてみると、韓国人の伝統的なスタイルはバジ・ジョゴリの上にドゥルマギをはおり、腰に帯をしめ、頭には帽子をかぶり、足首の短い履きものはくものである。

2. 韓国服飾の衣料の種類とその変化

韓国の古代社会には種麻と養蚕が普及し、麻布・絺布・縑布、そして絹織物も生産されていたので、織物技術が非常に発展していたことがうかがえる。三国時代には絹織物と布織物をはじめ毛織物もみられ、織物の技術とその多様

性を誇っていた。その代表的なものをみると、まず絹織物の「錦」は金と同じ重さで交換するほど高貴なもので、錦の字もこうした意味から由来する。錦は多彩な紋様が施されていて非常に高価な絹織物で、王族を中心に使用された。

つぎに「紵」は紵麻(苧麻)の繊維で織った生地で、9世紀新羅の海外輸出品として知られる。苧麻は韓国の気候と風土にとっても適した繊維植物であったため、古くから広く栽培され、それをういた織物(苧布)は朝鮮時代に至るまで、韓国の特産品のひとつとして数えられていた。

苧布に似たものとして麻布と絺布があるが、麻布は黄麻皮でつくる生地である。また絺布は棉花が栽培されていない古代には楮の皮でつくられた。縑布はいくつかの繊維を合わせて糸をつくり、それを織った密度の高い細布であった。他方、毛織物としては様々な動物の毛を利用して織ったものが利用されていた。

すでに古代社会の三国時代に非常に発達していた織物と染色技術はその後の高麗時代(918-1392)に受け継がれていく。

農耕社会であった高麗時代の主な産業は農業で、国民経済と国家財政の収支は米と布によって行われ、米と布の経済時代だと言っても過言ではない。農家では「農者天下之大本」の勸農政策の下に稲作と穀物栽培を主業とし、養蚕・苧麻栽培、織物、牧畜の副業をもって生業としていた。

織物生産は農家にとって最も重要な副業であった。しかし、三国時代には織物を中国や日本などに輸出するほど発達していたが、度重なる外侵などによって輸出国から転落し、高級の絹織物の「紗羅綾緞」などは中国から輸入していた。そうした状況の中であって、細麻布と苧布だけはいつそう発達し、献上品として、また中国などの輸出品として売られていた。

高麗後期になると、1363年に文益漸が元の使節団として派遣された時、中国から持ち帰った棉花によって、韓国の衣料史上に一大革命をもたらした。特に庶民階級の衣料として広く普及した。

高麗時代には織物が家内手工業として発展し、苧布・麻布・絺布・縑羅・錦などが生産され、献上品として、あるいは商品として特産品化していく。特に慶尚南道の晋州と慶尚北道の慶州は縑羅の産地として、忠清北道の清州は養蚕の産地として、慶尚北道の安東は真絺の産地として、慶尚北道の星州は黄麻布(麻布)の産地として、慶尚南道の南海は白苧布の産地として有名であった。

また中央官庁には都染署・雑職署などの御用達の織物機

関が置かれ、それぞれ専門の匠がいて、各種の織物を担っていた。中でも白苧は韓国の特産品として有名で、古くから国際貿易品のうち重要な位置を占めていた。韓国の白苧は色の潔白さが玉と同じく美しいと評判が高かった。

やがて高麗末期に木綿が伝来すると、従来の絹織物や苧麻織物に加え、一般庶民の衣生活は飛躍的に豊かになってくる。

つぎの朝鮮時代になってからも、織物は依然として手工業の域を出ず、大きな発展がみられない。それは、この時代に階級的身分制度が確立され、商工業に従事する者は賤視されていたからであり、また階級による厳格な服飾禁制がしかれていたため、高級衣料の生産を妨げる結果となり、その発達は停滞していた。しかし細麻布や苧布は朝貢として中国に輸出されており、高麗末から栽培され始めた棉花がこの時代に大きく発展した。朝鮮時代に生産されていた織物は、従来の紵や麻布・苧布に加え、新たに綿布の織物が登場した。高麗時代に発達していた高級の絹織物は姿を消し、粗悪な原糸からつくられる低級の紵だけが生産されていた。麻や苧麻に関しては細麻布と苧布がいつそう発達し、輸出品としても有名となった。麻の栽培は全国的にみられるが、後期になると北の咸鏡北道の会寧と鍾城が名産地となる。また慶尚道でも多くが生産され「嶺布」として知られるが、中でも安東で生産される「安東布」は今でも有名である。現在、これらの麻布は喪服として重宝されている。他方、苧布は主に忠清道と全羅道の海岸地域で生産されていたが、後期になると忠清南道の韓山・舒川・鴻山・庇仁・林山・定山・藍浦が「苧布七処」と称せられ苧布の名産地として有名であったが、末期になるとそのうち「韓山」の苧布だけが全国に知られるようになる。木綿は既述したように、高麗末に中国からもたらされ、慶尚南道の晋州の丹城で栽培され始め、一気に全国へ普及して韓国衣料史上に大革命をもたらした。15世紀の綿業は塩業と鉸業とともに朝鮮時代の三大基幹産業のひとつとして数えられ、その綿布は租税の一種ともなり、麻布に代わる代表的な貨幣としての機能を果たすようになる。しかし、後期になるにつれ、綿布は過重な賦課により衰退する。

3. 衣服の伝統と変化

三国時代以来、韓国は韓国固有の服飾と中国の服飾の二重構造の下で発展してきた。一般庶民の服飾は朝鮮時代までは変わりがなかったが、官服は中国服飾を導入した。そ

の特徴は男女服の外衣・內衣が今日の伝統的な「韓服」の姿に整えられた。男性服においては、まず笠制が確立し、袍制も官服の団領とは異なる、高麗時代の直領としての袍(白苧袍)が道袍→斲衣→周衣(ドゥルマギ)へと変化した。女性服においては、その保守性が強く、統一新羅以来の唐の影響による「華衣」「円衫」「唐衣」が今日に至る。その他、女性服には複雑な肌着の襦衣類が発達している。

特に身分制度が確立していた朝鮮時代には、服飾そのものが階級性を帯びたもので、これが上下・尊卑・貴賤の二元的構造をなしていた。それはおおむね庶民や賤民に対する服飾禁制としてあらわれる。庶民は韓国固有の基本型のうちバジ・ジョゴリが一般的であって、派手なものや、絹衣・紋様衣・染色衣などは許されず、それが韓民族を「白衣民族」と呼ぶ所以でもある。「常民」と呼ばれる庶民の衣服の基本構造は、バジ・ジョゴリである。古くは、ジョゴリは高句麗の古墳壁画にみられるように垂直型の長いジョゴリに帯をしめるが、統一新羅時代に中国の官服が導入され、外衣として足首まで長く帯を締める「袍」が入ってくると、ジョゴリの丈が短くなって交衽型に変わり、帯はオッゴルム(結び紐)に変わる。そして、高麗時代のジョゴリは蒙古服飾の影響を受け、ゆったりしていた袖が狭くなり、丈の長さも一段と短くなる。特に女性のジョゴリは朝鮮時代になると、極端に丈が短くなるという特徴がみられる。高麗時代は新羅の文化をベースにして築かれたが、政治的には北部の高句麗の後継者・復興者であり、北方民族との争いが続いた。中でも、蒙古族の侵略を受け、1259年から80年間に及ぶ間、蒙古族の元の干渉を受けることになるが、その間、服飾に与えた影響も少なくない。そのため、一部では開剃弁髪し胡服を着ることが余儀なくされたのも事実である。しかし大多数の庶民たちは、韓国固有の服飾を着ていたことはいうまでもない。一方、バジは「大口袴」と「窮袴」があって、その基本的な形は変わりが無い。しかし、庶民階級は大口袴よりは生業活動等に便利で、生地節約にもなる窮袴が着用された。そして、バジの足首はしめくくるための紐のデニムがある。このようなバジ・ジョゴリに履きもののボソン(靴下)とシン(靴)をはく。また庶民は冠物や袍類の着用において、その種類等が限られていた。

朝鮮時代の庶民の衣服は、世宗 31(1449)年正月に出された禁制の中からうかがい知ることができる。それによると、「庶人・工商賤隷は直領・袂注音帖裏を通着する」とあって、直領と帖裏が庶民服であることがわかる。直領は

衿が直線の袍の種類で、衿が丸い団領は朝鮮時代に官服となっている。他方、帖裏は上衣としわの裳がつけられた形の袖が広い直領交衽式の袍である。朝鮮時代の庶民服は当時の官僚服のうちの便服と好対照をなす。支配階層(両班)の普段の服装である便服は、冠帽と袍制にその特徴がみられる。典型的なスタイルは頭にカッ(黒笠)を被り、バジ・ジョゴリの上に外衣の袍を着る。袍には帖裏・直領・道袍・蹠衣などがあつたが、やがては周衣(ドゥルマギ)に変わる。

朝鮮時代の女性の服装の基本型はチマ・ジョゴリであり、その構造的変化は認められない。しかし丈や襷には少し変容がみられる。

女性の髪は既婚女性のあげ髪・まげ髪、未婚女性の辨髪・束髪などであった。そして男女区別の内外法の厳しかった朝鮮時代には、女性の外出時に顔を隠すために被る長衣などが存在していたのは特記すべきことである。

女性の場合、普段の服装(平常服)は上流階級も一般庶民の女性も大きな差は認められない。朝鮮時代には男性の官服制度が中国の服飾制度を襲用していたが、女性服は韓国固有のものを固執していた。女性服の基本構造は上述した通りチマ・ジョゴリであり、これは古来より変化がない。

ただし、ジョゴリの場合、丈が尻まで届くほど長く、袖が中国の影響を受けて広くなり、帯を締めていたのが、蒙古の影響を受けて丈は短く袖は細くなり、帯の変わりに前を合わせてゴルム(結び紐)で結び止めるようになった。

女性服における中国の影響は、外衣の翟衣・露衣・長衫・円衫・華衣・袴子・唐衣など、チマの膝襪・大襪チマ、冠帽の簇頭里・花冠などにみられる。

当時の女性服の基本スタイルは蓋頭(布帽・羅火笠)・ジョゴリ・チマ・襖裙(幅の広いズボン)・襪(靴下類)・温鞋(草鞋)の姿になる。このうち高麗時代と異なるのは、ジョゴリが蒙古の影響を受けて丈が一段と短くなり、チマも肌着など合わせて7~8重と重ね着していたのが、外裳の内側に襖裙を着用するようになって、これが典型化する。

女性の普段着は礼服の内側に着るものと同じスタイルである。女性の礼服はチマ・ジョゴリの上に外衣の円衫・華衣・唐衣を着る。チマは飾りを施した大襪・膝襪チマを着用する。したがって女性の普段着はチマ・ジョゴリであり、これに靴下のボンソ(襪)と靴のシン(鞋・履)を履くのが典型的なスタイルである。

おわりに

韓国は古くから「東邦礼儀之國」と知られるが、それは

衣冠に強く表され、これを尊重してきた。普段の日常生活のくつろいでいる時でも冠をかぶり袍を着用するのが、士人としての身だしなみとされてきた。韓国固有の服飾は男性の「バジ・ジョゴリ」、女性の「チマ・ジョゴリ」の上に外衣のドゥルマギを着ると、伝統的な衣裳のおおよその姿が出来上がる。

こうした伝統衣裳に、古来より中国の服飾が導入され、王はもとより、両班の士大夫や、中人の下級官僚あるいは軍役者などがすべて中国式の官服を着用して、衣生活の上で二重性をもっている。しかし役所では中国製の官服を着用した官吏層も、家庭に帰ると日常的には昔ながらのバジ・ジョゴリの姿でくつろぐ。

そして1910年からの日本による植民地支配や朝鮮戦争後の近代化の中で、旧来の官服制度は完全に姿を消し、礼服・平常服ともに西洋化がはかられ、今度は伝統と西洋という二重構造が形づくられている。

【参考文献】

- 柳喜卿・朴京子 1983『韓国服飾文化史』源流社
金文子著・金井塚良一訳 1998『韓国服飾文化の源流』勉誠出版
国立国語院編、三橋広夫・趙完済訳 2006『韓国伝統文化事典』教育出版株式会社



写真 1. 若い女性の典型的な韓服スタイル (林在圭 2010年撮影)



写真 2. 色鮮やかな子供と女性の韓服 (林在圭 2010年撮影)

アフラシア no.7

執筆者

吉田 正紀 (日本大学)
古沢 紘造 (駒沢大学)
小幡 壮 (静岡県立大学)
赤堀みずき (静岡県立大学)
加藤 巖 (和光大学)
秋野 晃司 (女子栄養大学)
林 在圭 (静岡文化芸術大学)

発行日 2010年3月1日

発行 現代アジア・アフリカセンター

運営理事 古沢紘造(代表)、小幡 壮、澁谷利雄、吉田正紀、
近藤富士夫、秋野晃司

アフラシア同人 草野孝久(独立行政法人国際協力機構)
林 在圭(静岡文化芸術大学)

アフラシア編集長 秋野晃司

デザイン 鈴木勝行

発行所 現代アジア・アフリカセンター

千葉県南房総市富浦町大津 137 (古沢紘造)

Tel: 0470-33-4579

印刷 (株)東京工芸社

非売品